

がて日本にも伝わった。古くは平安時代の貴族や僧侶の日記・詩文などに語られている。

三尸が寿命を縮めるといふ観念、および庚申の日に夜を徹する習俗は道教に由来する。一方で、これをすべて日本固有の伝統と捉える見方も民俗学には根強くある。日本では仏教的な習俗に変容しており、青面金剛が祀られた。この病魔退散の本尊を刻んだ庚申塔は、ほぼ全国に見られる。庚申すなわち「かのえさる」にちなんで、足もとに「見ざる聞かざる言わざる」の三猿を従える。神道に傾斜していくと猿田彦命が祀られる。

ふた月に一度めぐってくる庚申の晩、村の男衆と女衆がそれぞれ別の家集まる。一晩中おしゃべりをして過ごす。これを月待ちと呼んだ。そこで悠長に語り、語りを聞く。そうした機会が、ついこのあいだまで私たちの身近にあった。

宗教が広まっていくとき、どこまで在来の民俗に浸透しているか、あるいは逆に、民俗事象のなかに呑み込まれて変質を余儀なくされるか。その具体的な経過を観察してみれば、むしろ周囲の文化と混雑していく方が、よほど宗教の現実の姿に近いように思う。シンクレティズムこそ宗教の現実のありようだとは言えないだろうか。

日本の庚申信仰は、道教と仏教と民間信仰が溶けあつて変容をかさねてきた。民俗学者がこれを日本固有のものと見なしたのもそれなりの理由があった。ある場面では宗教とさえ認識されなかったのである。しかし、その大もとをたどってみれば、民俗事象の根底に宗教の長い歴史があり、それはアジアにまでつながっていた。大学の教養教育のなかで、そうした視野から

宗教の広がり大きさを伝えることができればと思う。

「日本宗教史」の教え方

——特に神道の論じ方と関連して——

鎌田 東二

発表者は二十五年近く「宗教学」を担当してきた。学生に望むことは、「とらわれを捨て、自分の眼で物事をとらえ、自分の足でたずね歩き、自分の頭で考える」ことで、そのための素材となる知識と理論と考え方を提供することを心がけている。

講義概要は、「宗教は人を救うか、それとも破壊するか?」かつて、近代化が進むと宗教は衰退するか消滅するといわれている。しかし実際には、宗教は近代化の中でも生きつづけ、さらにそれを超えて生きつづけている。新新宗教にひかれ、入信する若者も少なくない。いったい、このような「宗教」とは何だろうか。本講義では、宗教の発生と展開と社会とのかかわりを、広く文明論的かつ比較宗教学的な観点と方法によってとらえ、考察を加えてゆく。宗教はいかにして生まれ、どのような社会の中で発達してきたのか。またどのようにして社会を変革し、社会に規制されてきたのか。その相関関係を諸宗教の歴史的变化と構造的性質を比較検討する中で明らかにしてみたい。これまでの宗教の功罪と未来の可能性についても考えてみたい。【「宗教学Ⅰ」…春学期・前期シラバス)、【本講義は春学期授業「宗教学Ⅰ」を受けて、その観点と方法に基づいて「日本の宗教」を考察する。特に、比較文明論的かつ比較宗教学的な観点

と方法により日本の宗教と社会の構造的性質を探り、歴史的変遷を明らかにする。具体的には、およそ一万年前の縄文時代の宗教世界から現代のオウム真理教などの新新宗教まで取り上げる予定。日本人の自己認識において、日本の宗教と社会に対する理解と認識は不可欠の要素となるだろう。その意味では本講義は、「日本」とは何か、「日本人」、「日本文化」とは何かを反省的にとらえる時の手がかりになるだろう。【「宗教学Ⅱ」・秋学期・後期シラバス】としている。

後期の「宗教学Ⅱ」は、前期で取り上げた宗教学の諸概念や理論や世界宗教史の諸相と関連づけながら、日本の宗教史ないし宗教文化の特質を考察する。その際、授業者として心がけていることは、全体的な枠組みを理解する手掛かりとなる試論・史観を提示することと、関連する視聴覚教材を用いたり、日本の古楽器(石笛、龍笛、法螺貝など)を直接演奏して、リアルな感覚体験を提供することの二点である。わたしの提示する史観は、歴史は直線的に発展ないし変化していくのではなく、螺旋構造的に前代の課題を隔世遺伝的に引き継ぎながら拡大再生産していくという「スパイラル史観」である。例えば、①古代・神話(神祇信仰)の時代、②中世・宗教(仏教)の時代、③近世・学問(儒学・古学)の時代、④近代・科学技術(洋学・西洋教)の時代などの大局的な時代区分や特徴付けをし、古代と近代、中世と現代のスパイラル的共通的重合を指摘する。また我が国の民族宗教である神道の変化を、①神神習合時代、②神仏習合時代、③神仏分離時代、④神仏諸宗共働時代と区分して、時代的変遷とその時代の特徴を捉えやすい仮説的視

点ないし枠組みを提示する。それに関連して、各時代に特徴的な神社の創建を、①古代の出雲大社、②中世の吉田神社・大元宮、③近世の日光東照宮、④近代の靖国神社を例に挙げて、祭神や創建に至る時代的要請を考察する。また、各時代を統合する社会イメージを、①古代の調停的一者、②中世の根源的一者、③近世の仮構的一者、④近代の外向的一者、⑤現代の象徴的一者として提示し、そのような見方の根拠と妥当性を吟味する。さらに各時代の芸能の変遷を、①古代の神楽(神人一体)、②中世の申楽・能(神人複合・半神半人)、③近世の歌舞伎(人間世間)として時代比較する。また本来、神道と仏教が原理的に違っていることを、①神は在るモノ／仏は成る者(在神／成仏)、②神は来るモノ／仏は往く者(来神／往仏)、③神は立つモノ／仏は座る者(立神／座仏)と対照化して示す。以上の諸点が「日本宗教史」を授業する際の工夫である。

パネルの主旨とまとめ

星野英紀

大学教員には二つの大きな仕事がある。教育と研究である。理念的にいえば、両者は車の両輪のごとく不可分の関係にある。しかし、過去においては、大学教員に限れば、実態としては研究が第一で教育は副次的なものだったように思う。しかし高卒のほぼ五〇%が大学進学する現代においては、大学において教育の占める重要度が、かつてと比較して格段に増した。ま